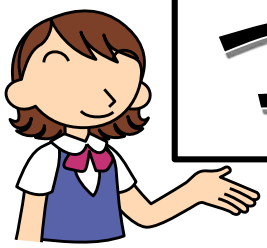


つながり

奈良県立ろう学校　特別支援部
２０１９年　６月号

ご参加ありがとうございました

５月１６日（木）担当者研修会へのご参加、ありがとうございました。
はじめに全体で「きこえの基礎」や「難聴児への支援」についての講習会を行った後、各校種に分かれて情報交換会をしました。その一部を紹介させていただきます。

保育園・幼稚園

難聴幼児に対する配慮や支援のポイントは、年齢によって異なります。そこで、幼稚部での情報交換会は年齢別に分かれておこないました。「歌の歌い出しや楽器演奏時の合図はどのようにしたらいいか？」「絵本を読み聞かせるときの配慮点は？」「水遊びやプールの時の対応の仕方は？」など、地域園の先生から積極的に質問が出されました。視覚的な支援の在り方などについて、発達段階に応じた情報交換をおこなうことができました。

（文責　山本）

小学校

各学校での児童の様子について報告した後、プールや音楽、英語、避難訓練、ことばの指導法について取り組んでいること等、情報交換しました。ポイントを以下にまとめましたので、もし参考になりましたら幸いです。

【プール】
- 子どもの**目を見て**合図をする。
- 旗を使った**サイン**をあらかじめ決めておく。
- **ホワイトボード**に指示内容を書いて伝える。
（あらかじめ指示内容を書いた紙をラミネートして作っている学校も！）

【 音楽 】
- 正しい音程で歌うことを目標にしない。それよりも**音楽の楽しさに触れる**ことを目標にすると良い。

【 英語 】
- 英単語には必ず**ルビ**をふり、強いアクセントの部分を**太字**にする。
- ヒントになるように、**絵や写真**を提示する。
- 前もって、当日の授業内容を伝えて、**予習**させておく。
（どんな英単語が出るか知っていれば、実際の授業で聞き取りやすくなる。**難聴児は初めて聞く言葉は苦手**。）
- 教員の**口形**が見えるように意識する。

【避難訓練】
- とにかく周囲の様子を見て、**友達について行く**ように指導する。
- クラスで、実際に火事が起こったときどうするか話し合っておく。
- 難聴の子どもが**１人だけわからない状況にしない**よう、教員も気をつける。

【ことばの指導】
- 指文字やメモを活用して、**丁寧に音韻**をおさえる。
（発音があいまいで聞き流してしまいやすい。書かせるなどしてしっかり確認する。）

☆どれも大切なポイントです。子どもの実態に合わせて、工夫しながら取り組めるといいですね。

（文責　椿野）

中学校・高等学校　中学校3校、高等学校3校、計6校から参加いただきました。

中学生になると「まわりに聞こえないことがばれたくない」「目立ちたくない」などの思いから、支援を拒否してしまうケースが多くなるようです。「大丈夫？聞こえている？」と聞かれることもわずらわしい。なので、本人が本当に聞こえているのか、困っていることはないのかを把握することが難しい、と報告されました。

各校一人ひとりの気持ちに寄り添い、入学時にクラスや学校の人たちにどのように説明するかを本人と話し合って決めていただいたそうです。授業の時横に座られるのも嫌がる生徒もいます。視覚情報（板書やプリント）を増やしてもらうなど、さりげない支援がいいのでは、という話になりました。

1番の話題は英語のリスニングについて、でした。
リスニングの方法については個人の聴力が違うので、その生徒に合わせておこなわなければいけません。音源（放送、CDデッキなど）を工夫したり、座席の工夫をしたり、別室で聞いたりするなど、いろいろな方法を経験して、どの方法がいいのかを選んでいけるように生徒と相談をしていただきたいと思います。
また、実際に高等学校で支援を担当していた英語の先生から、ご自身の経験を話していただきました。「英語の授業はTTでおこなった。サブのTが、主のTの言ったことを、パソコンで打ち出すという方法。対象の生徒に近づきすぎないよう、配慮した。必要があれば、生徒本人がのぞき込めるような位置で。パソコンか、筆記か、プリントかが、支援の方法だった。聞いて理解するのが難しい生徒だったので、自分のできる力（読んで理解する力）を伸ばした。できるだけ目に見えるように、説明の資料等は事前にプリントにして、配布した。受験対策として、やはりいろいろな選択肢を体験し、自分で考えることができるようにするのが大切」というお話でした。

担当する生徒にどの方法が合うのか、すぐには見つからないでしょう。本人も経験してみないとわかりません。本人と相談しながら、試行錯誤してみてください。もし必要があれば、ろう学校のほうにご連絡を下さい。ぜひ一緒に考えたいと思います。　（文責　田中）

今年も実施します！夏の交流会♪

子どもたちがとても楽しみにしている交流会の季節がやってきます。「今年もあの子に会えるかな？」「互いの学校でのことを話したいなあ。」「みんなでどうやって勉強しているか聞きたい。」など、それぞれ仲間たちのことを考えながら少しずつ準備を始めています。
一緒に案内を同封していますので、詳細はそちらをご覧ください。

「きらきら☆なかよし交流会」

日時　令和元年　7月22日（月）
場所　奈良県立ろう学校　食堂　各学年の教室
内容　「コミュニケーションゲーム」「みんながわかる工夫をして遊ぼう！」

「集まれ！中高生」

日時　令和元年　8月23日（金）
場所　奈良県立ろう学校　本館3階　会議室
内容　「～ミニ講座～聴覚障害について知ろう！」「フリートーク」

☆聴覚障害者からのメッセージ　Part2☆

「困りごとを語る」ということ
～きこえない当事者としての主体性をもつために～

滋賀県立聾話学校教諭 / 学校心理士　　西垣　正展　先生

私が通常学級で授業を受けていた小学校4年生の時のことです。

休み時間、運動場に出ると、クラスの男子たちがボールを使って遊びに興じています。見ていると、両端に大きな円があり、そこに決められた回数分を踏破すればゴールとなるゲームのようです。自分もやってみたいと思い、遊んでいる友だちに「すみません。僕も入れてください」と頭を下げて頼みました。

すると、守備に入っていた友だちが笑って別の友だちに何かを言っています。それを聞いた友だちはこちらを一瞥したきりで、応答してくれる人は誰もいません。相手にしてもらえないことで悲しくなった自分は職員室に行き、担任の先生に自分がゲームに入れてもらえなかったことを伝えました。採点をしていた先生は「その友だちに聞いてみます」とだけ言われ、また採点に取りかかっていました。

その日の夕方、母から「友だちの集まりに入れてもらう時に何と言うの？」と訊かれ、なぜそのようなことを母から言われるのかを理解できずにいました。すると、母から次のようなことを言われました。「休み時間に遊びに入れてもらえなかったようだけど、友だちはあなたの言い方がおかしいと思って相手にしなかったみたいよ。集まりに入れてもらう時は「僕もよせて」と言わないと仲間に入れてもらえないよ」と。

その時の私は、休み時間の出来事が「自分の頼み方がおかしかったせいでゲームに入れてもらえなかった」という理解ではなく、「友だちの集まりに加えてもらいたい時に「僕もよせて」という言葉を言えばよい」という理解で終わっていました。しかし、何か釈然としないものを感じましたが、その事を誰にも言えないままでいました。

それから10年後のことです。きこえにくい学生の集いで、自身の教育体験について話し合う機会がありました。思うままに小学4年のその出来事を話すと、一人が「私もあるわ」と自分の体験を語り、次々にその場にいたメンバーも自分が通常学級で学んだ時に体験したことを語り始めました。その語りを見ているうちに、それまで釈然としなかった思いが少しずつ整理されてきました。

まず、自分が遊びに入れてもらえなかったことが問題の発端なのに、**先生の対応によって、自分の言語行動のおかしさを問題点としてすり替えられていたのです。**それも、母を通して、集団に入れてもらう時のマナーの指導を受ける形となり、仲間に入れなかった友だちが感じたことが正当化される形になっているのです。そして、**友だちに相手にされなかったことを自分が困りごととして感じることができない状況に陥ってしまっていた…**ということがわかってきました。

このように当時の自分の困りごとが整理化され、かつ、周囲（友だち、先生、母）の対応の課題が見えてきた時に、やり場のない怒りがふつふつと湧いてきました。なぜ、仲間に入れなかった友だちとの話し合いの場を持つことをしなかったのだろうか？**なぜ、当事者に説明することなく、母に伝える形になったのだろうか？**なぜ、当事者の困りごとを皆がわかろうとしなかったのか？…と。

同じ体験をもつ当事者たちの語り合いによって整理されてきたこの出来事の問題点は、私が教員を志すきっかけの1つともなりました。「周囲の無理解によって困りごとを語れない当事者を作ってはならない」と一。その思いは、30年後の現在、きこえにくい子どもたちが困りごとを**自分の言葉で語り、仲間に伝え、解消していく**ことを目指した私の教育実践につながっています…。

西垣　正展先生の文を読んで・・・

奈良県立ろう学校　椿野

前ページの西垣先生の原稿を読み終えた時の第一声は、
「ああ、自分にもそんな経験があったなあ。」
でした。

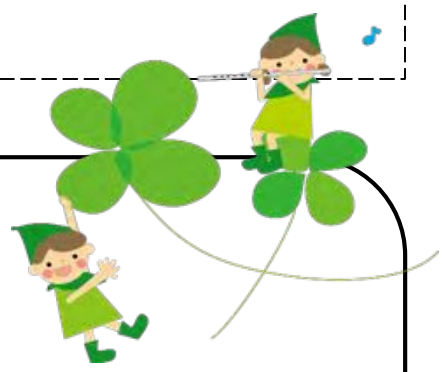
おそらく、聴覚障害を持っている方であれば、客観的にその事実を意識していたいないに関わらず、少なからず似たような経験をしたことがあるのではないかなと思います。

「あの子はきこえにくいでしょ。ぼくはこう言ったのに伝わらないし。話し方も不自然だし。」

こうなった場合、きこえにくい自分は不利な立場に置かれることを幼心に認識していました。ただ、1人の人間として友達との関係に悩み困っていることが、いつの間にか難聴の問題にすり替えられ、耳のせいにされてしまい、本質的な問題点について話し合う機会を得られぬままに過ごさざるを得なかった小学校時代、どうやったら、みんなは自分に向き合ってくれるのだろうか？と考えていた時期もあります。しかし、母親や教師といった第三者の介入によって、自分の言葉で語るチャンスは少なく、思春期をむかえる頃にはだんだん周囲とのコミュニケーションをあきらめていきました。ようやく主体的に考え、動き、周囲に働きかけられるようになったのは高校生の時でした。そのタイミングはやはり一人ひとり違います。

難聴の子どもたちが、「きこえにくさを自覚し、それによって困ることを自ら語り主体的に解決する力」をつけさせるために、今、私たちにできることは何でしょうか。担当の先生方一人ひとりに考えていただき、ぜひ一緒に取り組んでいきたいと切に願っています。

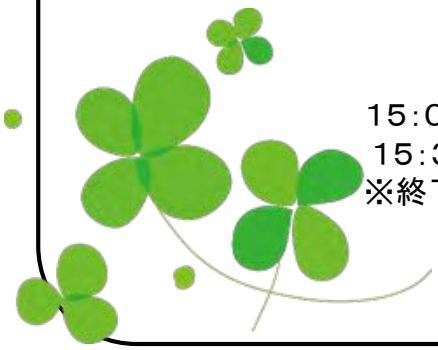
次回の担当者研究会には西垣先生ご本人をお招きし、当事者として学校でどんな困り感を持っていて解決されたのか、またご自身の指導経験から難聴学級で取り組める内容等について、お話をしていただく予定です。



第2回　聴覚障害教育担当者研究会

8月22日（木）　12:45～受付
13:10～15:00
講演　西垣　正展先生
「きこえにくい自分に気付くことの大切さ」
～聴覚障害者として主体的に生きる力を育てるために～

15:00～15:20　　質疑応答など
15:30～16:30　　校種別情報換、担当者交流
※終了後個別相談（希望者のみ）



※申込書は同封している案内に添付しております。